Pride & Prejudice の中に見られる ジェーン・オーステンの信仰的姿勢

宮 川 下 枝

先年 Emily Brontë の信仰を考えるにあたって，その前に同時代の女性作家姉 Charlotte また George Eliot の信仰も，一緒に考察してみたいと思い，英文学研究9号，11号において扱ったことがあった。その際，Jane Austen も一緒に扱うべきではないかと思いつつ，オーステンは，信仰的な態度を持っていると考えられてはいないから，という理由から考慮に入れないでいた。だが，彼女の作品を読んでいれば，どうしてもその底に深い信仰が横たわっているように思えてならない。それも，*Pride and Prejudice*（傲慢と偏見）の中においてであるが，そうした箇所に幾つか出合い，どうしてもこの度はその問題をとり上げて見たくなった次第である。
だから，この小論も私としては，9号，11号に続く，エミリー・ブロンテの研究—その信仰—に属するものとしたいのである。

羊頭を掲げて狗肉を売るの感は，更に深いものになることは覚悟しよう。

ジェーン・オーステンの小説を批評したものを読むと，彼女の小説が信仰を表明しているとか，又は信仰的である等と言っている人はあまりいないようである。

現に，研究社のテキストの序論のその作家小伝に依れば，「女史の特質ともいうべきものは，Charlotte Brontë のような熱烈な感情家たる点でなく，Hannah More のように道徳的だった点でなく，又崇高な理想があったとか，信仰があったとかいうのでなく・・・(1)」と表明されている。

また，田辺昌美氏の「ジェーン・オーステンの文学」にも，彼女が信仰的であったとは書ていないし，石塚虎雄氏も「ジェーン・オーステン論」

において，彼女の信仰を述べてはいない。

彼女を魅力ある作家と考えている人は多く，

with person so amiable and elegant in mind and manners

（心も態度も，とても愛らしく，優美な人で）[2] と James Edward Austen は言い， a wit, a delineator of character[3] （機智に溢れ，性格描写のうまい人で） と Mary Russel Mitford は言い， in lightness of heart[4] と Sir Walter Scott はその気軽さを賞めている。

更に，彼女を偉大な作家と考る人は多数で，Virginia Woolf も次のように述べている。

Of all great writers she is the most difficult to catch in the act of greatness.[5]

（偉大な作家のうちで，彼女程その偉大さにの現場を抑えにくい人はない。）

でも，彼女が一番賞讃されているのは，その気軽なユーモアであろう。

But there is a mind in it, tenderness, humor, irony, the charm of delightful personality, and above all life, there is life.[6]

（その作品の中には，賢さがあり，やさしさ，ユーモア， 皮肉， 明るい人柄の魅力がある。だが，何よりも生命に溢れていることである。）
—Forrest Reid—

このような批評では，私が考えてみたいと思っている論の裏書きにはならない。何か私の論を証拠ずけてくれる根拠となるものが欲しいのである。

牧師の娘として生まれ，牧師の父の側で，一生を過したシャーロット及びエミリー，ブロンテ姉妹の作品の中に信仰的態度がうかがえるのは当然のことであろう。同様に，ジェーン・オーステンも亦，牧師の娘として育った人であり，更に父なきあとは，兄が牧師としてそのあとを継いでいる。この女性作家の中に信仰的なものが流れていたとしても，決して不思議はない筈である。だが，これが私の独断でないためには，更にその伝記を読

んでみることにした。そして，彼女の甥にあたる（オーステンの長兄の息子）James Edward Austen-Leigh の書いたものを読み，彼の種々の証言を読んで非常に嬉しかったのである。彼は，先ず自分の子供心に残るおばの姿を次のように述べている。

She was pretty—certainly pretty—bright and good deal of color in her face—like a doll.(7)

（おばは綺麗でした。確かに綺麗でした。明るく顔色もよくて，お人形のようでした。）

確かに，ロンドンの Portrait gallery にある彼女の像は，ポッと桜色に明るい頬の女性であった。"She was fair and handsome"(8)（彼女は美人でした。）と認めている。こうした，美しい明るい美人の独身のおばを，ダンスの好きな女性として覚えていることは興味深いことであるが，

Many country towns had a monthly ball throughout the winter in which there can be no doubt that Jane herself enjoyed dancing.(8)

（多くの田舎のまちには，冬の間一月に一度はダンス・パーテーが催され，ジェーンもそこでダンスを楽しんだことは疑いがない。）

舞踊会に行き誰と踊った，また，パートナーがなかった等と屈託もなく書かれた明るい手紙が残っているのは興味深い。

だが私に喜びを与えたのは，それ等の記述ではなく，次の言葉であった。

In that simple church she brought them all into subjection to the piety which ruled her in life, and supported her in death.(9)

（その小さな教会に旅いて，彼女はすべてを信仰的考え方に隷属させた。その信仰心は，彼女の一生を支配し，死に於いても彼女を支えたのであった。）

ここにはっきり piety（信心）と書かれているではないか。それも彼女の一生を支配し，死に於いても彼女を支えたとあれば，もう私は自信を以って，私の論を進めてもよいと思うに至ったのである。

更に，彼女の友にあてた手紙の中には，明瞭に彼女の信仰を表明している箇所があるから引用しておきたい。

.....to forget or neglect your duty of a good Christian in dressing your better part which is your soul, as will best please God.(10)

(あなたの魂というより大きなあなたの部分を，せいぜい神さまのお気に召すように飾ることでの，よきキリスト教徒としてのあなたの務めを，おろそかにしたり，忘れたりしてはいけませんわ。)

また，ジェーンが34才の時には，落馬して死んだ，尊敬する年上の友人に悲しみの詩を書いているが，その中にも彼女の Christian faith は明らかに現われている。

Hers is the energy of soul sincere:
　Her Christian spirit, ignorant to feign,
Seeks but to comfort, heal, enlighten, cheer,
　Confer a pleasure or prevent pain.(11)

(彼女の魂は力溢れる真実な魂である。
彼女のクリスト教精神は偽わることを知らず，
慰さめ，いやし，明るく元気づけ，喜びを与え，苦痛を防ぐことのみを求める。)

更に，次の節に於いては，

To meet thee, angel, in thy future home.(12)

「天国においてお逢いしましょうね。」と永生を信ずる言葉で結んでいる。

では，いよいよ本論に入ることにして，彼女の信仰的態度が，「傲慢と偏見」の作品の中に見出される処に触れてゆきたい。私は遠慮して題においては，信仰的姿勢としておいたが，そこ迄控え目にする必要はないかも知れない。何しろ彼女自体が作家であることは表明せずそっとテーブルの上で細い紙片に人の会話等を書きつけ，客が見えれば，そっと隠していたと言うし，また，彼女が作品に示す控え目さについても次のようにのべられている。

She preserved her faith in moderation and discipline. Without obtrusive effort or exertion of visible influence she gave to her world

what it most required—an exampled and ordered serenity.(13)

(彼女は自分の信念を控え目に抑えている。押しつけがましい努力もせず，目に見える影響を与えよう等と努力はしていないが，世の中が最も必要とするものを与えたのである。即ち，模範的な秩序ある平静さをである。)

更に彼女の本は，

shy proud book—and moral earnestness(14)

とあり誇高い書物であるが，控え目だという処が面白い。

以上の如く，おしつけがましく，自分の主張を述べる人でもなく，堂々とその信念を表明する人でもない彼女の作品の中に奥底深く流れるものを汲み取ってみたいと思うのである。

この有名な「傲慢と偏見」は，もう概略を述べる必要はあるまいと思う。多くの批評家が認めているように機智に富んだ明るい作品であり，その中の女主人公の Elizabeth は，作者自身が非常に愛した heroine である。この明朗な頭のよいエリザベスは，茶目っ気ぽく一寸した皮肉を言ってみたり，鋭い批判の言葉を口にしたりするのであるが，態度の純真，活発さの故に彼女を憎むことは出来ないという女性に，仕立てられている。登場する主人公達の，心の進展の段階を経て心的成長を遂げ，相手の心をよく理解出来る点に達して，結婚が成立するのであるが，興味深いのは humorous な，わき役たち，また，その中に溢れる妙味溢れる会話であろう。さて，その根底を流れるものとして私が認めたいのは，次の二つである。

① 神の喜び給うものは砕けたる魂である。

—詩篇51篇—

② 汝，心を尽くし，精神を尽くし主なる汝の神を拝すべし。

—申命記　六章四節—

勿論，ジェーン・オーステンはこのような押しつけがましい主張を表明しているのでないことは，先程も引用によって述べた通りであるが，ただ，この砕けたる魂という敬虔な態度を，主人公達の心的発展とともに認めるし，心を尽くし，精神を尽くし，人を喜ばせようという態度を見るのであ

る。

① 敬虔な態度

オーステンの描く人物に，悪人はいないと言われている。まあ，この点はシャーロット・ブロンテ等から見れば，余程物足りなかったらしく，ひどくやっつけているのであるが，情熱家のシャーロットとは自ら異るであろう。また，エミリーのような，悪魔的人間を描いた人にも，同じように物足りなく感じられたことであろう。

エリザベスが，姉ジェーンを評して，次の言葉を投げかけているが，オーステンの描く人物の穏やかさを示している。

"With your good sense, to be honestly blind to the follies and nonsense of other!...to take the good of every body's character and make it still better, and say nothing of the bad—belongs to you alone."
Pride and Prejidice (Chap. IV)

(あなたは分別を働かせて，他人の愚かなところや，馬鹿さには素直に目をつぶり，誰の性格だってよい処ばかり見て，それを一層よくし，悪い処は一寸も言わないのは，お姉さんだけの持っていらっしゃるところよ。)

聖書の中にも，愛は人の悪を思わず，

Love suffereth long, and is kind: love envieth not: love vaunteth not itself, is not puffed up. (*Corinthians* I—13)

(愛は寛容であり，愛は情深い。また，ねたむことをしない。愛は高ぶらない。誇らない。)

—聖書コリント前書　13章—

とある，このような愛の精神に基ずくものであると考えれば，オーステンの作家態度もよく理解出来，別に彼女にむかってかみつきたくもなくなって来る。

もっとも，彼女の作品の中に出て来る人物が総べて，姉，ジェーンのような寛らかな根からの善人ばかりであったら，この小説も退屈なものになるであろうが，そこは彼女も作家である以上，心得えたもの，エリザベスがいなくなれば得たりとばかり悪口を言う，ビングレーの姉，その妹等が

いて，興味の尽きない処が描かれている。

批評家たちが There is tenderness.（心やさしさがある。）と批評しているこの tenderness は，愛の精神に基盤をおくものであると考えたい。エリザベスは機智に富んだ女性であるが，人を刺すような言葉は投げかけない。

"She is torelable, but not handsome enough to tempt me." *Pride and Prejudice* (Chap. III)

（まあまあだね。でも僕の心を惹く程美人じゃないね。）

これは舞踏会において，貴族の青年紳士 Mr. Darcy が友人に立ち乍ら話しているのをエリザベスもふと，きいてしまう。だが，彼女は別に，目くじら立てるでもなく，この torelable まあまあだねなる言葉を後日，友人に面白がって話している。オーステン自身，舞踊会に行ったことを姉に手紙をかき，相手が無かったこと等も屈託なく話しているのであるから，彼女にしては極く自然な書き振りだったのであろう。唯，程経て催されたダンス・パーティーにおいて，その同じダーシー氏から，どうぞダンスのお相手をと丁寧に所望された時は（尤もルーカス卿を通してのことではあるが）彼女の断わり方がふるっている。

"Indeed, sir, I have not the least intention of dancing. I entreat you not to suppose that I moved this way in order to beg for a partner."

Pride and Prejudice (Chap. VI)

（まあ，卿，私はダンスをしたいなんて一寸も思っておりませんでしたの。こちらの方へ参りましたのはご相手をお願いに参ったのだとお思いにならないで下さいまし。）丁寧だが痛快に言い放っている。更に，「どうぞ」と手を出して頭を下げるダーシー氏に，

"Mr. Darcy is all politeness," said Elizabeth smiling. *Pride and Prejudice* (Chap. VI)

（本当にダーシーさんは御丁寧でいらっしゃいますわ。）とにこやかに言ったとある。そして，

Elizabeth looked archly, and turned away. (ibid.)

（エリザベスは茶目っぽい目をして，向うへ行った。）とある。

思うことは明瞭に述べる，はっきりした新しい女性を描いてはいるが，その態度には相手を傷つけないようにとのやさしさが溢れている。にこにこし乍ら言ったその答え，また茶目っぽい様子は憎めなかった。鮮やかな場面でる。

② 愛と決断の場面

ビングリー家の姉妹たちに，退屈で仕方がないから遊びにいらっしゃいと手紙の誘いを受け，姉ジェーンは出かけて行く。Gentry（中流上層階級）である，ベネット家には自家用馬車はない。総べての外出は，馬車でなされていた時代である。このベネット家では，外出の際は馬車を借りるのであるが，母親であるベネット夫人は「馬で行きなさい。雨が降りそうだから。」とすすめる。雨に濡れては大変だという思慮深さはなく「雨になれば，馬では帰えれなくなって，泊めて頂くことになるであろう。」とあるチャンスを目論んでいるような，母親の姿は全く滑稽である。こうしたところに，オーステンは得意の筆を振っているのであるが，とにかく，ジェーンは母親の思う壺にはまり，雨に濡れ，ビングレー家で熱を出して寝こんでしまう。翌朝はベネット家には姉ジェーンからの実に心細い手紙が届けられる。娘の滞在を喜ぶ母親の姿はますます漫画であるが，ここに断固とした決意をするエリザベスの姿が見られる。もともと作者オーステンにはカサンドラという唯一人の姉がおり，非常に仲がよく，何でも話し合える姉妹であり，またオーステンを最後迄見取った人である。故に，小説にも断固とした姉思いの姿が出ていても当然であろうが，胸のすくような場面が描かれている。馬車はない。自分には馬に乗る技術はない。喜んでいるような母親の態度は我慢出来ない。「私が行きます。」「歩いて行きます。」

"Distance is nothing when one has a motive." *Pride and Prejudice* (Chapt. VII)

（動機があれば，距離は問題じゃないわ。）と勇敢にも裾をはしよって，

朝早く雨上りのぬかるみの道を一人3哩も歩くのである。当時はジプシー等がいて女性の一人歩きは危険であるためオーステンもひとりで散歩は滅多にしなかったと，伝記の中にも書かれているのである。この勇気ある行為も，愛の精神に基くものと考えてよいであろう。水たまりを跳び超え，柵を越え，足早に歩く彼女は，目指す家が見え出した頃までには，足は汚れ，靴下は汚れ，運動で頬は紅潮していたのである。

and a face glowing with the warmth of exercise..*Pride and Prejudice* (Chap. VII)

「お姉さんと一緒に途中迄ついて行く」という二人の妹達の魂胆は，将校に逢いたいためであると見透していても，快く同伴するのも，又エリザベスの心のやさしさである。

早朝の女一人の出現に，ビングリー姉妹は驚きもし，その泥んこの姿を見ては眉をひそめてしまう。

her petticoat six inches deep in mud. *Pride and Prejudice* (Chap. VIII)

だが，彼等にはエリザベスの本当の勇気ある姿を理解することは出来ない。出て来て深く頷いたのはダーシー氏のみであった。

Mr. Darcy said very little..admiration of the brilliancy which exercise had given to her complexion *Pride and Prejudice* (Chap. VII)

(ダーシー氏は口数は少かったが，運動で紅潮した顔は，美しいと思った。)

このエリザベスの中にある，信ずることのためには，ためらわず，決行する勇気ある愛の姿を見てとったのは，ダーシー氏だったわけである。

蛇足であるが，このよいと思うことは，即座に決行する性格は，ジェーン・オーステンの父の性格であったようである。老年令に達すると即刻にステーブントンの牧師の職を止め，バスに移り住むように決定し，心の準備の出来ていないオースティンにとっては，住み慣れたスティーブントンを離れて見知らぬ地に行くのは辛かったようである。(15)

③ 砕けたる魂

これも，私が聖書の言葉を思い出して，引用しただけのことであって，オーステンが聖句を引っ張り出しているのではないことは当然のことである。ただ，私はそう感ぜずにはいられないのである。

徐々に，エリザベスに心惹かれて行ったダーシー氏は，遂に彼女に求婚するに至る。だがこの求婚は，彼を誤解している彼女のために，こてんこてんにやっつけられる。地位も，家柄も，財産もある自分からの求婚は相手には，無論受け入れられると踏んでいた，ダーシーにはこの断わりは予想外のこととて，非常な驚きであったし，大きな痛手でもあった。彼からの求婚を断わる彼女の理由は誤解から来るものであるとは知らずに，エリザベスは一つ一つの理由を冷静に述べて，それを受けることは出来ない訳を話すのである。だが流石一気に喋りまくってしまうと，ひとりになって泣き伏す姿が描かれている。私共もこの泣き伏す女らしさにやっと安心する。

言葉も出ない程の衝激を受けたダーシー氏は，黙ってその場を立ち去るが，翌日長い弁明の手紙をエリザベスに渡すのである。が彼はこの中でも，誤解のもととなっているウィッカムのことを決して悪しざまに罵ってはいない。親切にしたウィッカムにひどい仕打ちを受けたダーシー氏であるが，誤解の一つ一つを丹念に解いてゆく。オーステンの描く人間像は高潔である。

彼は悪魔であろうかと罵倒する「嵐ケ丘」の中のイザベラの態度とは，大いに異るところである。

だが，一つ一つの説明を読み終ったあとの，エリザベスの態度も見事である。自分は何と浅はかなものの見方しか出来ない人間であったことであろう。本当の意味での人の親切が分らない人間であったのであろうかと謙虚に自分を見つめ，恥じ入っている。この砕けた心のエリザベスを見る時，ここにも私はオーステンの信仰的態度を感じとるのである。

オーステンは，*Emma* に於いてもそうであるが心砕かれては成長してゆく女性像を描いている。男性としても同じことで，ダーシーにしても，求

婚を断わられたことによって，自分の持つ自負心を根こそぎにへし折られたのであるが，心から謙遜になって，もう一度勇気を出して，求婚することになるのである。

真相の分った今では，自分が恥かしく穴があれば入りたいような心境であったエリザベスは，

one so wretched as herself *Pride and Prejudice* (Chap. XXXIV.)

早速帰って姉のジェーンに総べてを話すのである。

妹の告白をじっときいて呉れる姉の態度も立派であるが，それをきき終ったあとでの彼女の言葉が素晴しい。

Miss Bennet's astonishement was soon lessened by the strong sisterly partiality which made any admiration of Elizabeth appear perfectly natural and all surprise was shortly lost in other feeling. *Pride and Prejudice* (Chap. XL)

(ジェーンの驚きも，妹が賞讃されるのも当然だと思っていた姉の妹に対する姉らしい強い思いやりの為に，ぢきに和らいで行った。あらゆる驚きもすぐに他のいろいろな感情の為にすっかり消えて行った。)

さてこの姉の言葉は，

"And poor Mr. Darcy! Dear Lizzy, only consider what he must have suffered." (*ibid.*)

(まあダーシーさん，お気の毒に。どんなにお悩みになったことでしょう。考えてもご覧なさい。) と同情に溢れている。

"At present I will say nothing about it."(*ibid.*)

(今のところウイワカムさんのことについては，何も誰にも言わないわね) という妹に答え，

"You are right. To have his errors made public might ruin him forever." (*ibid.*)

(そうよ，あなたの考える通りよ。その人の過ちを触れ廻って人に知らせれば，その人は永遠に駄目になってしまうわ。)

人のことを言い触らすことは，その人をこの世から抹殺してしまうことになるという，実に的確な判断を下している。このような寛大な精神は，

矢張り牧師の家庭において涵養された信仰的生活に基ずくものであろう。

だが，この場合賢いエリザベスは，総べてを告白したとは言え，姉の気持を考慮して姉の心を曇らせるようなことは言わず自分の胸にしまっておく。

言うことも勇気の要ることであるが，言ってはならぬことは，断固として口を噤んで言わぬことも愛と勇気の要ることである。

この情景の中には，美しい姉妹愛が漲っていて，実際のオーステン姉妹の仲のよさが写し出されている。

オーステンの育った地は，南イングランドのロンドンを少し離れた気候も穏やかな静かな平和な処であった。Steventon に於ける牧師館は芝生の中の木の茂みに囲まれた，こじんまりしたものであった。父は，Oxford 大学出の高い教養をもつ地主であった関係上，収入も充分あり平和な牧師の家庭であった。(16)

同じ牧師を父に持ったにしても，エミリー・ブロンテの育った地は北部の荒涼とした荒地であり，同じくケンブリッヂを出た学識ある人にしろ，貧乏なアイルランド農家に生れた父は，苦学をして給費生として大学を終えている。

暗い陰欝な気候，家庭と言えば六人の子供を残して，母の亡くなった後は，父と世話に来た叔母との家庭である。その淋しさに耐え兼ねた父が，毎朝気晴しに教会の壁に向ってピストルを打つというような家庭であるから，このような環境に育った，エミリー・ブロンテがジェーン・オーステンと人間の解釈を異にするのも当然のことであろう。

④ **汝の敵をも愛せよ。**(聖書マタイ伝4章7節)

この心打ち砕かれた，エリザベスに更に追い打ちをかけるように，妹 Lydia の駈け落ち事件がおこる。打ちのめされたエリザベスは，総べてをダーシーに打ち明ける。而も駈け落ちの相手はウイッカムである。ひどい目に逢わされたウイッカムであるのに，ダーシイは，総べてをじっと聞き入ったあとは，直ちに実行に移り，ウイッカムの借金を払ってやり，彼に

定職を見附けてやり，やがて，リディアと二人が正式に結婚出来るように計ってやっているのである。こうした彼の寛大さの中に，勿論エリザベスに対する愛の心があることもあったであろうが敵もを愛せよという，信仰的態度を見出す思いがするのである。

又，暫く恋人の心が理解出来ないままに，姉のジェーンにも逢わないでいたビングレー氏もたまたま姉ジェーンに逢うチャンスが到来する。逢えば相手の心も和んで姉に求婚するという，楽しい瞬間がある。エリザベスは姉の幸福を心から喜びこそすれ，姉の幸福を羨んだり妬いたりはしていない。家族揃ってジェーンの幸福を喜び合う心あたたまる寛大さである。

⑤

話の筋は climax に達しダーシーの再度の求婚の決心の場となるのである。これを受けるエリザベスの側には心からの歓びがある。

It was gratitude—gratitude not merely for having once loved her, but for loving her still well enough to forgive all the petulance and acrimony of her manner in rejecting him, and all the unjust accusations accompanying her rejection. *Pride and Prejudice* (Chap. LXIV)

(それは本当に感謝の気持であった。かつて自分を愛してくれたことがあったというだけではなく彼の最初の求婚を断った際のあの横柄さ，激烈さを許してくれ，その断りの際のあらゆる非難をも許してくれ，今なお彼女を愛してくれていることに対する深い感謝であった。)

うまくは答えられなかったが，今のお申し出を心から感謝してお受けします。と答えている。

The happiness which this reply produced was such as he had probably never felt before: and he expressed himself on the occasion as sensibly and as warmly as a man violently in love can be supposed to do. *Pride and Prejudice* (Chap. LVIII)

(その答えがひき出した喜びというものは，今迄彼が一度も味ったこともない程の幸福な思いであった。そして激しい恋をしている男がこれ以上には自分の喜びを表現は出来ないだろうという風にこの慶事に当って，賢

こく且つ熱誠に自分の喜びを表わした。) the expression of heartful delight ..(*ibid.*) と心からの歓びの表情が描かれている。二人は歩き乍らエリザベスは心から「すみませんでした。」と彼に向って謝っている。心を尽くし精神を尽くしての気持がここにも出ている。

一方，ダーシーの方も今度の申し込みの際は前とは打って変った謙虚な態度である。

"If your feelings are still what they were last April, tell me so at once. My affections and wishes are unchanged: but one word from you will silence me on this subject forever." *Pride and Prejudice* (Chap. XVIII)

(もしも，あなたのお気持ちがまだ去年の4月のままでしたら，すぐそう仰っしゃって下さい。僕の愛情も願いも一寸も変ってはいないのですが，あなたの一言で，私はこの問題には二度と触れなことにしましょう。)

とまだあ時のままにお嫌いなのなら，そう仰っしゃって下さい。二度とこのことには触れずに諦らめますという。当然受けてくれるだろうと思っていたような前回の不遜な態度とは大変な変りようである。ここにも心砕かれて成長していく男性の姿が描かれている。

Twelve readings of "P & P" give you twelve periods of pleasure repeated.(17)

(何度読んでも面白い小説である)

wit に富んだ小説であり，数々の面白い人物が登場し，又活き活きとした会話，irony 等が私共を楽しませてくれるのであるが，矢張り読者の心を温かく包んで呉れるのは主人公達のもつ愛の心，即ちジェーン・オーステンのもつ愛の精神ではなかろうか。

初めはおずおずと書き出したこの小論文であったが，更に，信仰的態度の根拠の裏打ちとなる幾つかの文を見い出し，私は今非常な勇気を得て，自分の意見が独断ではないと言い切ることが出来る喜びを以ってこのテーマを終ることが出来る。ではその文を次に掲げておきたい。

The record of baptism for Jane Austen at Steventon in Hampshire, dated 17 December 1775.(18)

(彼女が1775年12月17日ハンプシャーのスティーブントンに於いて洗礼

を受けたという記録が残っているという事実。

It has become commonplace to undervalue the importance of religion in Jane Austen's writing.(19)

(ジェーン・オーステンの作品の中にある信仰の重要性を軽視することが普通になてしまっている。)

If we listen carefully we can hear Jane Austen's own voice.(20)

(もし我々が耳を澄してきけばジェーン・オーステンの本当の声をきくことが出来るのである。)

Cassandra Austen records her sister as having an especial love of this church, Winchester Cathedral.(21)

(姉カサンドラは，次のように記録している。妹ジェーンはウインチスエスターの教会に特別の愛着を持っていたと。)

The inscription on her grave in Winchester Cathedral records her faith and not her success as a writer of fiction.(22)

(ウインチェスターの教会にある彼女の墓の銘記には，小説作家としての彼女の成功のことは書かず，彼女の信仰だけを記録している。)

以上のような文の数々を，Brian Wilks の Jane Austen という最近発行された美しい大型の本の中に見出した時は，非常なよろこびであった。私も数年前オーステンの教会を訪れたことがあった。そしてウインチェスターの教会内の彼女の墓を教えられたのだった。内陣の人の踏む床の黒い畳一枚位の大理石の上に銘が彫られている。人が歩くところにお墓がある等とは，到底私共には考えられないことで実に奇妙な感じがしてその前に立ち，しげしげと眺め入ったことを覚えている。遂にその上は踏まぬようにしてそっと廻り乍ら歩いたのだった。ではその銘の後半をここに記して終りとしたい。

Jane Austen's grave in Winchester Cathedral

Their grief is in proportion to their affection
they know their lots to be irreparable.

but in their deeper affliction they are consoled
by a firm though humble hope that her charity
devotion, faith and purity have rendered
her soul acceptable in the light of her
Redeemer

ウインチェスター教会内のジェーン・オーステンの墓

彼らの嘆きはその情愛にそぐへり
彼らはそのさだめの覆へしがたきを知る
されどそのいや深き痛恨のうちにも
かの人の慈愛，道心，信仰と純情は
救い主のみ胸の中に
その魂を嘉みされしとの
慎ましくも堅き望みによりて慰めらるるなり

註

(1) *Pride & Prejudice* (Introduction)
(2) *A Critical Biography*....R.W. Chapman.....Oxford p.21.
(3) *ibid.* p.22.
(4) *ibid.* p.24.
(5) 〃 p.44.
(6) 〃 p.48.
(7) 〃 p.57.
(8) *Memoir of Jane Austen by Her Nephew James Edward Austen Leigh* .....Oxford p.8.
(9) 〃 p.23.
(10) 〃 p.58.
(11) 〃 p.59.
(12) 〃 〃
(13) A Critical Biography p.44.
(14) 〃 p.45.
(15) Memoir of Jane Austen p.59.
(16) 〃 p.57.

(17) A Critical Biography p.43.

(18) Jane Austen.....Brian Wilks....Mamlyn..... p.16.

(19) 〃 p.102.

(20) 〃 p.103.

(21) 〃 p.138.

(22) 〃 p.106.